

『廻諍論』に説かれる空について

—śūnyatā と śūnyatva の用例を中心に—

清水 仁

序論

『廻諍論』(*Vigrahavyāvartanī*, 以下 VV)¹には、「空性」を意味していると考えられる語に śūnyatā と śūnyatva の 2 語がある。今までそれら両語の区別は明確には意識されずに、特に śūnyatva は「空」や「空性」などと訳されてきた²。しかし、龍樹 (Nāgārjuna ca. 150-250) の著作である『中論』(*Mūlamadhyamakakārikā*, 以下 MMK) も合わせて、両語の用例を検証すると、龍樹が自身の空思想を明らかにするために、VV においてもそれらを意図的に使い分けていたことがわかる。すなわ

¹ これまで『廻諍論』については龍樹の真作であるかが問題になっており、Fernando Tola & Dragonetti [1995], [1998]、松本史朗 [1997]、五島清隆 [2008a] などにその指摘がある。松本氏は最終的に VV をほぼ 5 世紀に、Tola & Dragonetti は 5 世紀以降に成立したものとしている。そして、五島氏の最新の研究では、MMK における龍樹の仏陀観が VV のものとは異なることや、『十二門論』(成立は 4 世紀中頃) の中に VV を前提とした表現があることを指摘し、VV の成立を 4 世紀半ばより以前としている (五島 [2008a] pp. 154-156)。筆者は、後述するように VV における対論者が空を一貫して虚無的に理解していることから、空や無自性を実在視する対論者を想定する MMK 諸註釈書よりも古い成立だと考える。よって、青目・無畏に先立つ、3 世紀後半より以前の成立だと考えている。

五島氏の指摘にあるように VV の著者を龍樹とするには疑わしい点が見受けられるが、伝統的には龍樹の著作と見なされてきたもので、本稿では、便宜的に VV に説かれる主張は龍樹のものであるとして以下に論を進める。そして、たとえ VV は龍樹の真作ではないにせよ、その著者を龍樹に帰せるようにして龍樹の意を汲み著されたものであるので、MMK 諸註釈書と同等に MMK の解釈を助けるものであるとみなして VV を扱う。

また現在では、MMK 理解にはかなりのところが諸註釈書の解釈によるところが大きくなっている。しかし、後述する MMK 第 13 章のように、本来いずれの諸註釈書とも異なる理解をすべきだと考えられるところもあるので、非常に困難な作業ではあるが、諸註釈書に依らない MMK そのものを理解する試みもなされるべきだろう。

なお VV において、対論者との論争の中で龍樹は空・無自性をどのように論証しようとしていたのか、その詳細な研究については斎藤直樹 [2008], [2010] がある。

² śūnyatā と śūnyatva これらは空 (śūnya) に抽象名詞語尾を付した名詞である。藏訳では stong pa や stong panyid などと訳され、漢訳では空、空義などと訳され、この 2 語の区別はあまり意識されていないようである (VV を対象にした今までの研究書等も同様である)。

ち、龍樹の中心思想は「空性」(sūnyatā) であって、その「空性」がいかなるものであるかを示すため、実際的な対論者との論争の中で、あらゆる諸事物が空であることを説くのに用いられたのが sūnyatva であった。また、MMK と VV における両語の用例の分析を通して、VV に説かれた空思想について考察する。

1. MMK における sūnyatā と sūnyatva の用例

MMK において、sūnyatā と sūnyatva の使用頻度には大きな開きがある。sūnyatā は複合語となっているものも含め、19ヶ所に見られる³。それに対して sūnyatva は、ただ第 27 章の第 9 偈の 1ヶ所のみである。これは偶然ではなく、韻律の制約がある中でも、龍樹が意識的に使い分けていたことがわかる。以下に、MMK における用例を確認する。

1.1 MMK における sūnyatva の用例

まず、MMK に一度だけ見られる MMK. XXVII. 29 の sūnyatva の用例を確認する。

あるいはまた、すべての諸事物が空であるから、常住などのいかなる諸々の見解は、どこで、誰に、どうして、ありうるだろうか。【MMK. XXVII. 29】⁴

これが MMK における唯一の sūnyatva の用例である。この用例は明らかに空性 (sūnyatā) のような特別な意味はなく、空 (sūnya) を理由句で示すために sūnya を名詞化して、Abl. (Ablative、以下 Abl.) で用いている⁵。そして、その空であるという限定を受ける語（ここではすべての諸事物、sarvabhāva）は複数形の Gen. (Genitive、以下 Gen.) で表される⁶。

この第 27 章第 29 偈では、それまでの第 28 偈までに説かれる 16 種の命題が成り立たず、あらゆる諸事物が空であるから、常住などの諸々の見解が否定されるという。この MMK 最終章に説かれる sūnyatva は、それまでの各章で自性を否定し、「空性」がいかなるものであるかを明らかにしてきたことを踏まえて、常住論などの悪見を否定するその根拠として sūnyatva が理由句とし

³ 後述する MMK. XXIV. 14. d 句は含めていないが、これは韻律の関係で sūnya となっているもので、sūnyatā と理解するべきものだろう。本偈については後述する。

⁴ *atha vā sarvabhāvānāṃ sūnyatvāc chāśvatādayaḥ /
kva kasya katamāḥ kasmāt sambhaviṣyanti dṛṣṭayaḥ* // 【MMK. XXVII. 29】MMK. p. 500.

この偈に関しては金沢[2009]pp. 156-167. に詳しく、MMK. XXV. 22 偈との関連が指摘されている。

⁵ 五島[2009]もこの箇所を『単に「諸法が空であること」を示しているにすぎない。』と理解している。

⁶ MMK において、Gen. に限定され、-va が Abl. となって、理由句として用いられている用例はここだけである。

『廻諍論』に説かれる空について（清水）

て用いられていたのだと考えられる。ここが *sūnyatā* の Abl. でなく *sūnyatva* の Abl. であるのは必然である。

また MMK における空 (*sūnya*) は、諸事物の個々の存在の次元で、業と諸々の煩惱 (*karma kleśāḥ*)⁷、取 (纏) (*upādāna*)⁸ などを限定するのに用いられている。また、MMK. XXII. 14⁹ には「自性として空である」ともある。そのように *sūnya* は「空性」の妥当性を論証するために、あらゆる諸事物の個々の存在の次元で用いられていたのだと考えられる。よって、第 27 章第 29 偈の *sūnyatva* も、すべての諸事物のそれぞれが空であることを示しているのだろう。

後に確認するように、*sūnyatā* は「縁起」(*pratītyasamutpāda*) や「中道」(*madhyamā pratipat*) などと等置されることはあっても、業や諸煩惱などに限定されることはない。

他にも MMK には、空と同等の意味であると考えられる *niḥsvabhāva*¹⁰ が説かれる。MMK 全体で計 5 回用いられており、次の表のような分布となっている。

第 1 章	第 10 偈	計 1 回
第 13 章	第 3 偈 (<i>niḥsvabhāvatva</i>)	計 1 回
第 17 章	第 21 偈	計 1 回
第 22 章	第 16 偈×2	計 2 回
合計		計 5 回

第 1 章第 10 偈¹¹ では「無自性である諸事物に実在性は存在しない」(*bhāvānāṃ niḥsvabhāvānāṃ na sattā vidyate*) というように、複数形の Gen. となっており、ここでは *niḥsvabhāva* も諸事物の個々の存在の次元で無自性であることが説かれている。また、第 17 章第 21 偈¹² では、業が不生不滅で

⁷ *karma kleśāś ca dehānāṃ pratyayāḥ samudāhṛtāḥ / karma kleśāś ca te sūnyā yadi deheṣu kā kathā* // 【MMK. XVII. 27】MMK. p. 284.

⁸ *phalaṃ notpatsyate 'sūnyam aśūnyam na nirottsyate / aniruddham anutpannam aśūnyam tad bhaviṣyati* // 【MMK. XX. 10】MMK. p. 334.

⁹ *svabhāvataś ca śūnye'smiṃś cintā naivopapadyate / paraṃ nirodhādbhavatī buddho na bhavātī vā* // 【MMK. XXII. 14】MMK. p. 378.

¹⁰ この語は伝統的に「無自性」と訳される語であり、従来 *svabhāva* の対義語であると考えられている。もちろん自性を否定する語であるので、*svabhāva* と対に用いられる際には、意味上は対義語である。しかし、MMK において一度しか用いられないが、*asvabhāva* が第 13 章第 3 偈に用いられる。用例がこの一例しかないもので、断定はできないが、龍樹はこの *asvabhāva* を *svabhāva* の対義語としていたのだと考えられる。龍樹は諸事物の *svabhāva* を否定した一方で、諸事物の *asvabhāva* も否定していたのだろう。龍樹は、その両者を離れた *niḥsvabhāva* を説いていたのであって、龍樹の意を汲むならやはり「離自性」とでも訳すべきだと考えられ、直接本稿の論述に関わる MMK. 第 13 章の考察の際では、「無自性 (離自性)」と訳して考察する。

¹¹ *bhāvānāṃ niḥsvabhāvānāṃ na sattā vidyate yataḥ / saññam asmin bhavaṭī etan naivopapadyate* // 【MMK. I. 10】MMK. p. 18.

¹² *karma notpadyate kasmāt niḥsvabhāvaṃ yatastataḥ* /

あることの根拠として *niḥsvabhāva* が説かれ、第 22 章第 16 偈¹³では如来と世間 (*jagat*) がともに無自性であることが説かれている。

後述する第 13 章第 3 偈に見られる「諸事物は無自性 (離自性) である」(*bhāvānāṃ niḥsvabhāvatvam*) という用例は、複数形の Gen. に限定され、*niḥsvabhāva* に *-tva* が付されているが、Abl. になっておらず注目される。しかし、次章で見る VV では、*niḥsvabhāvatva* や *sūnyatva* が複数形の Gen. の語に限定され、その前後の文脈から、その Gen. の語に示される事物が無自性や空であることが述べられていることが確認できる。よって、VV に説かれる用例を踏まえて、第 13 章の前後の文脈から考えると、自性がある (*svabhāva*) のではなく、まったく自性がない (*asvabhāva*) のでもない、諸事物の無自性 (離自性) であることが説かれていたと考えられる。

つまり、MMK における *niḥsvabhāva* は、*sūnya* と同様、諸事物の個々の存在の次元で無自性・空であること示す語であった。一方の *sūyatā* の用例を次に確認する。

1.2 MMK における *sūnyatā* の用例

MMK において、計 19 回用いられる *sūnyatā* の各章の分布は次のようになっている。

第 4 章	第 8 偈、第 9 偈	計 2 回
第 13 章	第 2 偈、第 3 偈、第 8 偈×2	計 4 回
第 17 章	第 20 偈	計 1 回
第 18 章	第 5 偈	計 1 回
第 24 章	第 6 偈、第 7 偈×3、第 11 偈、第 13 偈、第 14 偈、第 18 偈、第 22 偈、第 36 偈、第 37 偈	計 11 回
合計		計 19 回

「空性」(*sūnyatā*) は Nom. (Nominative)、Acc. (Accusative) の他に、Inst. (Instrument.) や Loc. (Locative) でも用いられるが、Abl. の理由句で用いられることはない。また、*sūnyatā* が複数形で用いられることもない。

第 13 章第 8 偈では、

勝者たちは、「空性」とは一切の観念から離れることであると説かれた。しかし、「空性」という観念ある者たちは不治である、と述べられた。【MMK. XIII. 8】¹⁴

yasmāc ca tadanutpannaṃ na tasmād vipraśyati // 【MMK. XVII. 21】 MMK. p. 280.

¹³ tathāgato yat svabhāvas tat svabhāvam idaṃ jagat /

tathāgato niḥsvabhāvo niḥsvabhāvam idaṃ jagat // 【MMK. XXII. 16】 MMK. p. 378.

¹⁴ sūnyatā sarvadīṣṇāṃ proktā niḥsaraṇaṃ jinaṃ /

『廻諍論』に説かれる空について（清水）

とあり、勝者である諸仏によって、空性とは一切の観念から離れることであると説かれたが、またその「空性」の観念をも、持つてはならないとされる。上述した第27章第29偈と合わせて考えると、「空性」とは一切の観念から離れることであり、一方の *sūnyatva* は常住論などの観念に向かう、観念を否定する機能としてはたらく。

そして第18章第5偈では、

業と諸々の煩惱の消滅により解脱がある。業と諸々の煩惱とは、分別により〔生じる〕。それら〔諸々の分別〕は、戲論により〔生じる〕。しかし、戲論は「空性」において滅する。【MMK. XVIII. 5】¹⁵

とある。戲論により諸々の分別が生じ、分別により業と諸々の煩惱が生じる。しかし、「空性」においては戲論が減っていて、「空性」においてこそ解脱が可能である¹⁶と説かれる。

そして、第24章第7偈において、第6偈まで批判を向けてきた対論者に対して、君たち（実在論者たち）は「空性における目的」と「空性」と「空性の意味」を知らないのだ、と龍樹は言い、第18偈においては、

我々は「縁起」を「空性」であると言う。（また、）それは因施設であり、まさにそのことが「中道」である。

【MMK. XXIV. 18】¹⁷

という。この偈は、MMKの中でも「空性」が「縁起」や「因施設」、「中道」と言い換えられる重要な偈である。まさにこれら第24章に説かれるように、MMKにおける龍樹の中心思想が「空性」であることは明らかであり、その「空性における目的」と「空性」と「空性の意味」を明らかにするために、MMK全体を通してあらゆる諸事物が空（*sūnya*）であることを説き、自性がな

yeṣāṃ tu sūnyatādṛṣṭis tām asādhyaṃ babhāṣire // 【MMK. XIII. 8】 MMK. p. 214.

後述するように後代の MMK 諸註釈書では、【MMK. XIII. 3】は空性や無自性を実在論的に理解する対論者の偈であると解釈される。その影響を受けて、第8偈に説かれる空見（*sūnyatādṛṣṭi*）の理解も、現在に至るまで、龍樹が MMK を著した当時とは異なる解釈がなされてきたと考えられる。しかし、紙面の関係上、別稿で改めて詳説したい。

¹⁵ *karmakleśakṣayān mokṣaḥ karmakleśa vikalpataḥ /*

te prapañcāt prapañcas tu sūnyatāyāṃ nirudhyate // 【MMK. XVIII. 5】 MMK. p. 302.

¹⁶ 五島氏の指摘があるように、ここでは十二支縁起の流転分と還滅分を示しているだろう。五島[2009]p. 7. 参照。

¹⁷ *yaḥ pratītyasamutpādaḥ sūnyatāṃ tām pracakṣmahe /*

sā prajñāpūrvapādāya pratīpatsaiva madhyamā // 【MMK. XXIV. 18】 MMK. p. 426.

いことを示した。

以上、MMK における *sūnyatva* と *sūnyatā* の用例を確認したところ、MMK. XXVII. 29 偈に唯一見られる *sūnyatva* の用例は空 (*sūnya*) に -*tva* を付し、複数形 Gen. の語に限定されて、Abl. の理由句で用いるためのものであった。それは、あらゆる悪見を否定するための根拠として用いられていた。また、*sūnya* と *niḥsvabhāva* も、あらゆる諸事物の個々の存在の次で、それらが空・無自性であることを示すために説かれていた。

次章では、VV における *sūnyatā* と *sūnyatva* の用例を確認する。

2. VV における *sūnyatā* と *sūnyatva* の用例

MMK において一度しか用いられていなかった *sūnyatva* が、VV においては *sūnyatā* と *sūnyatva* がそれぞれ約 18 回と約 25 回ほど用いられ、MMK に比べて特に *sūnyatva* が多用されるようになっている。これは MMK. XXVII. 29 偈の *sūnyatva* の Abl. の用例が転換点となり、VV において、対論者との実証的な論争の必要に迫られて、*sūnyatva* を多用するようになったと考えられる。

以下に、VV における両語の用例を検証し、MMK と同様、龍樹の中心思想は「空性」であり、その妥当性を証明するために、実証的な対論者からの論争に合わせて、「あらゆる諸事物の自性は空である」という言明が妥当であることを説示するために用いられたのが *sūnyatva* であったことを明らかにする。

2.1 VV における *sūnyatva* の用例

VV は全 70 偈とそれぞれに散文が伴う構成になっている。始めの 20 偈では実在論者¹⁸による「空性」批判がなされ、後半の 50 偈で龍樹がその対論者の批判に答えるという形式になっている。VV の全体を通して対論者は次のような空を虚無的に理解して批判をする。

「すべての諸事物は無自性である」というこの君（龍樹）の「言う」ことには論拠が成立しない。なぜか。というのは、無自性であるから、〔すなわち〕すべての諸事物は空であるから、どうして論拠があるか¹⁹。【VV. 17 偈、自註】

¹⁸ 梶山[1974] p. 398 で「対論者として登場する実在論者には、二種ある。第一頌から第六頌ではニヤーヤ学派（正理派）が、第七頌から第二十頌のあいだにはアビダルマ仏教者があらわれる」と具体的に対論者が想定されている。

¹⁹ *niḥsvabhāvāḥ sarvabhāvā ity etasmin arthe te hetor asiddhiḥ / kiṃ kāraṇaṃ / niḥsvabhāvatvād dhi sarvabhāvānāṃ sūnyatvāt tato hetuḥ kutaḥ / VV. p. 119.*

『廻詮論』に説かれる空について（清水）

すなわち、「すべての諸事物は無自性である」と言う龍樹にとっては、自性が無いので、空（＝無自性）である、そのことばや主張によっては、何ものも否定することができないという。ここも MMK の用例で見たように、空 (śūnya) を理由句で用いるために、śūnya に-tva を付けた śūnyatva が Abl. で用いられている。VV 全体では、単数形または複数形の Gen. の語に限定されるもの、あるいは Gen. の語に限定されずに単独で用いられるものを合わせて、śūnyatva の用例の約半数以上がこのような Abl. の理由句の用法となっている。MMK と同様、śūnyatā が Abl. の理由句で用いられることはない。

また、龍樹が主張する空思想は、あらゆる存在そのものの存在を否定する虚無論なのではなく、非有非無の中道を説く。しかし、ここに見られるように、VV 全体を通して対論者は「空＝無」とであると誤って理解する。対論者によって、その空が「無」として理解されている箇所ではすべて śūnyatva が用いられている。これは龍樹が空を虚無的に理解する実在論者である対論者との論争には、śūnyatva を意図的に用いていたのだと言える。「空性」(śūnyatā) とは、空である、空でない、というあらゆる議論を超越したところのものであるからである。

そのような批判に対して龍樹は VV の後半部 21 偈以降で反論している。次の 22 偈の自註の中の用例もそのひとつである。

だから君（対論者）が、「無自性であるから君(中観論者)のことばが空であって、それ（ことば）が空であるから、それ（ことば）によってすべての諸事物の自性を否定することは妥当でない」と言ったことは正しくない²⁰。【VV.22 偈、自註】

ここでの対論者の批判も先ほど見た用例と同様に、空が虚無的に理解されている。特にここでは、śūnyatva が単数形 Gen. の「ことば (vacana)」に限定され、Abl. となっていないものと、Abl. となっているものの用例が確認できる。これらは、MMK には見られなかった用例である。VV における対論者は、中観論者が「諸事物は空である」と説くならば、その「諸事物は空である」ということば自体も自性がなくなるので、その主張そのものが成り立たなくなる、という批判を向けている。

MMK で一度しか用いられていなかった śūnyatva は、VV において、そういった実際的な対論者との論争に合わせて、ことばを始めとするあらゆる諸事物が、個々の存在の次元で空であることを示すために用いたり、対論者との議論の中で理由句として空であることを述べるために、多用されるようになったと言える。そういった議論の先に証明されるのが「空性」なのである。

²⁰ tatra yad uktam niḥsvabhavatvāt tvadīyavacanasya śūnyatvam, śūnyatvāt tasya ca tena sarvabhāvasvabhāva-pratiśedho nopapannam itī tan na // VV. p. 122.

他に、*śūnyatva* が Gen. の語に限定される箇所を調べたところ、複数形の「〔すべての〕諸事物」(*[sarva]bhāva*)」²¹か、単数形の「ことば (*vacana, vacas*)」²²、「名称 (*nāman*)」²³に限られる。*śūnyatā* が「諸事物」「ことば」「名称」のような単数形 Gen. の語の限定を受けることはない。

VV. 59 偈とその自註には、

すべての諸事物の空であることは先に証明された。それゆえ、その非難はこの主張がないことになる。【VV. 59】

ここで、われわれ（中観論者）は先にすべての諸事物の空であることの詳細を証明した。そのとき、すでに名称の空であることも述べた。君はそれ（名称）が非空であることだと固執し、「もし諸事物に自性がないなら、非自性、というこの名称がなくなるだろう」と言い返したが、それゆえ、この君の非難は証明する主張がないことになる。というのは、われわれは「名称は実存する」とは言わないから。【VV. 59、自註】²⁴

と説かれる。ここでは *śūnyatva* が複数形 Gen. の「すべての諸事物」に限定され、Abl. となっていない用例となっている。しかし、直後に「名称の空であること」もすでに述べたとし、*śūnyatva* は単数形 Gen. の名称に限定されている。つまり、この「諸事物の空であること」も複数形の Gen. に限定されてはいるが、諸事物の個々の存在の次元での空が説かれていると考えられる。すなわち、この第 59 偈の自註に見られる「諸事物の自性」(*bhāvānāṃ svābhāva*) と同じ存在の次元で説かれているのだろう。實在論者がことばなどに自性があると構想するときには、ことばなどの自性の帰属先を Gen. にして構想するので、そのような対論者の論法（あるいは当時のインド人に共通した思考法）に合わせて、それらあらゆる諸事物の一事が空であることを示すために、VV において Gen. に限定される *śūnyatva* を多用したのだと考えられる。このような対論者との実際的な議論においては、*śūnyatā* ではなく *śūnyatva* が用いられる。

次の第 62 偈もその一例である。この偈では対論者との論法に合わせた文脈であるが、空を實在視しているような用例が確認できる。

²¹ VV. 6 偈の自註と VV. 17 偈の自註、そして VV. 59 偈とその自註に見られる。

²² VV. 21 偈の自註、VV. 22 偈の自註、VV. 23 偈の自註に見られる。

²³ VV. 59 偈の自註に見られる。

²⁴ *sarveṣāṃ bhāvānāṃ śūnyatvaṃ copapāditam pūrvam / sa upālambhaḥ tasmād bhavaty ayaṃ cāpratijñāyāḥ* // VV. 59 //

iha cāsmābhiḥ pūrvam eva sarveṣāṃ bhāvānāṃ vistarataḥ śūnyatvam upapāditam / tatra prāḡ nāmāno 'pi śūnyatvam uktaṃ sambhavaśūnyatvaṃ parigrihya pravṛtto vaktum | yadi bhāvānāṃ svābhāvo na syād asvābhāva iti nāmāpīdan na syād iti / tasmād apratijñopālambho yaṃ bhavataḥ sampadyate / na hi vayanā nāma sadbhūtam iti brūmaḥ // VV. pp. 143-144.

『廻諍論』に説かれる空について（清水）

また、君が空であることを否定し、しかもその空であることは存在しないとすると、否定は実在するものにある、という君のこの議論は破綻する。【VV.62 偈】

また君がすべての諸事物には無自性であること、〔すなわち〕空であることを否定して、空であることが存在しないとすると、「実在するものの否定はあって、実在しないものの否定はない」という君の主張は破綻する。【VV.62 偈、自註】²⁵

ここでは VV.11 偈の対論者の「実在するものの否定はあって、実在しないものの否定はない」という主張をそのまま逆手にとり、対論者の主張に従えば、その対論者によってまさに空であることが現に否定されているのだから、対論者にとって空であることは実在することになってしまう、と反論している。ここでも、対論者との論争では *sūnyatva* が用いられるが、ここにあるように *niḥsvabhāvatva* は *sūnyatva* とは意味上ほとんど同じものであると見てよいだろう。

この「空であることは存在しない」(*sūnyatvaṃ nāsti*) という用例は龍樹が対論者の論法に合わせて述べたことであるとはいえ、空であることを実在的に表現している用例で注目される。後述するように、このような用例が MMK. XIII.3 を龍樹の偈とするか、対論者の偈とするか、という問題に関わっていると思われる。

ここには Abl. の用例が見られるわけではないが、このような対論者との論争や、論証の過程では *sūnyatva* がよく用いられる。次に *sūnyatā* の用例を確認する。

2.2 VV における *sūnyatā* の用例

対論者の主張に見られる *sūnyatā* は次の VV.10 偈の自註に、

〔対論者〕また君（中観論者）が、「名称が〔対象物をもたない〕空虚なものとなつてはいけな」と考えて、「自性はあるのだが、それ（自性）は諸法には属さない。このように、諸法が無自性であるから、諸法の空性 (dharmaśūnyatā) が成立することになり、また名称は無事物 (*nirvastuka*) でないことになる。」とするならば²⁶、【VV.10 偈、自註】

とある。龍樹はあらゆる諸事物の自性を否定し空であることを説く。しかし、対論者にしてみれ

²⁵ *pratiśedhayase 'tha tvaṃ sūnyatvaṃ tac ca nāsti sūnyatvam /
pratiśedhaḥ sata iti te nanv eṣa vihiyate vādaḥ* // VV.62 //

atha pratiśedhayasi tvaṃ sarvabhāvanāṃ niḥsvabhāvatvaṃ sūnyatvaṃ nāsti tac ca sūnyatvam, yā tarhi te pratijñā sataḥ
pratiśedho bhavati nāsata iti sā hīnā / VV. p. 145.

²⁶ *atha manyase mā bhūd avastukaṃ nāmeti kṛtvāsti svabhāvaḥ, sa punar dharmāṇāṃ na saṃbhavati, evaṃ dharmasūnyatā
niḥsvabhāvatvād dharmāṇāṃ siddhā bhaviṣyati, na ca nirvastukaṃ nāmeti,*
VV. p. 116.

ば、自性が存在しなければ、名称が空虚なものになり、あらゆる主張が成り立たない。そこで龍樹が「自性は存在するが、諸法に属さないような形で別に存在するのであって、その意味で無自性であるから〔諸〕法の空性²⁷は成立している」という苦し紛れの反論してくることを想定している。そして対論者は、事物から離れたような自性は認められず、その自性がどのものに属しているのかを説明するべきであると批判する。ここはあくまでも龍樹が直接述べた主張でないといふことはおさえておかなければならないが、「法性」とも等置できるような「空性」の複合語となっている。

次に龍樹が反論を始める VV.21 偈以降の VV.27 偈とその自註では、「ある人が、化作された女人を実在する、と誤認しているのを、如来の加持によって退ける」という事例は、空なるものによって自性を否定するので、「空性」の証明として妥当である。しかし、対論者の「声を出すな」という事例は正しくない、という議論がなされるが、ここの「空性」も、特に龍樹によって証明されるべき対象としてみなされている。ここもやはり「空性」が龍樹の中心思想であることを示している。このことは、VV.69 偈において「空性」論者 (sūnyatāvādin) という複合語²⁸があり、龍樹が自身らをまさに「空性」を論じる者である、としていることから明らかである。

VV 最後の偈が次の VV.70 偈である。

この「空性」が現前する者には、すべての目的が現前する。「空性」が現前しない者には、いかなるものも現前しない。【VV.70 偈】

この「空性」が現前する者には、世間、出世間のすべての目的が現前する。なぜか。というのは、「空性」が現前する者には、「縁起」が現前するから。「縁起」が現前する者には、四聖諦が現前する。(中略)「空性」と「縁起」と「中道」を等しい意味だと明言された、類まれな仏陀に私は礼拝する。【VV.70 偈、自註】²⁹

²⁷ 7 偈～20 偈は仏教部派内の実在論者であると考えられる。6 偈までの対論者が、あらゆる諸存在を bhāva の語で表していたのに対して、7 偈以降では dharma で表わされる。ちなみに法性の語が MMK に見られるのは MMK. 18.7 偈のみであり、ここでは法性は涅槃と同じように不生不滅であるとされている。

²⁸ sūnyatā の複合語は、他には「法空性」(dharmasūnyatā)、「空性」の意味 (sūnyatārtha)、「空性」論者 (sūnyatāvādin)、「空性」の証明 (sūnyatāprasādhana) がある。sūnyatārtha 以外の複合語は、MMK には見られない。

²⁹ prabhavati ca sūnyateyaṃ yasya prabhavanti tasya sarvārthāḥ /
prabhavati na tasya kīṃcin na prabhavati sūnyatā yasya // VV.70 //
yasya sūnyateyaṃ prabhavati tasya sarvārthā laukikalokottarāḥ prabhavanti / kīṃ kāraṇam / yasya hi sūnyatā prabhavati tasya prāṇīyasamutpādaḥ prabhavati / yasya prāṇīyasamutpādaḥ prabhavati tasya catvāry āryasatyāni prabhavanti / (中略)
yaḥ sūnyatāṃ prāṇīyasamutpādaṃ madhyamāṃ pratipadaṃ ca / ekārthāṃ nijagāda prajānamāmi tam apratimabuddham // VV. pp. 150-151.

この VV. 70 偈は MMK. XXIV. 14 偈³⁰との関連が指摘される重要な偈であり³¹、この個所に「空性 (śūnyatā)」が用いられているのは必然的である。その自註では、「空性」が現前する者には、世間、出世間のすべての目的が現前し、「縁起」が現前し、四聖諦が現前し...、とあらゆる法 (dharma) が現前するという。

そして、VV 最後の結びは明らかに MMK. XXIV. 18 偈³²を意識している。あるいは、第 18 偈に対する註釈となっていると見ることも可能だろう³³。ここで「縁起 (pratityasamutpāda)」と「中道 (madhyamapratipad)」と等置されているのが śūnyatva ではなく、śūnyatā であるのも偶然ではない。śūnyatā は一部、縁起や中道といった、重要な単数形の用語と等置されることはあっても、śūnyatva のようにことばや名称に限定されることもない。

以上、VV において śūnyatva は、特に龍樹の中心思想である「空性」(śūnyatā) の妥当性をめぐるとの論争の中で、単数形の名詞と等置されたり、単数形 Gen. の名詞の限定を受けて、諸事物の個々の存在の次元であらゆるものが空であることを示すために多用されていた。またときには、Abl. の理由句で、「空性」の妥当性を示す証因として説かれていたことが確認できた。śūnyatā においては、あらゆる議論がは特に証明されるべき龍樹の中心思想である重要な語として用いられている。

2.3 「すべての諸事物の空性」について

そして、龍樹が対論者に反論を述べ始める最初の VV. 21 偈の自註の最後には、

この場合、君 (対論者) が『君 (中観論者) のことばが空であるから、すべての諸事物の「空性」は妥当しない』と言ったのは正しくない³⁴。【VV. 21 偈、自註】

と説かれる。対論者にとっては、ことばに自性が存在せず空であれば、その主張そのものが成り

³⁰ 空性が妥当である者には、あらゆることが妥当である。

空〔性〕が妥当でない者にはあらゆることが妥当でない。【MMK. XXIV. 14】

sarvaṃ ca yujyate tasya śūnyatā yasya yujyate /

sarvaṃ na yujyate tasya śūnyatā yasya na yujyate // 【MMK. XXIV. 14】

³¹ 『無畏註』や『仏護註』では第 14 偈に見える sarvaṃ を簡単に一切の世間・出世間のことであると註釈する。『青目註』でも、同じように「一切世間出世間法皆悉成就」と簡潔に註釈している。『般若灯論』や『淨明句』では、より詳しい註釈がなされる。

³² yaḥ pratītyasamutpādaḥ śūnyatāṃ tām pracaṣṣahe /

sā prajñāptir upādāya pratīpat saiva madhyamā // 【MMK. XXIV. 18】 MMK. p. 426.

³³ VV では因施設 (prajñāpti) が壊れられていないことは注目される。

³⁴ tatra yad bhavatoṅkṣaṇaṃ tvadīyavacasāḥ śūnyatāḥ chūnyatā sarvabhāvānāṃ nopapadyata iti tan na / VV. p. 121.

立たなくなるので、龍樹が説く「すべての諸事物の空性」(sarvabhāvanāṃ śūnyatā) は妥当でない。あらゆるものに自性があるとする實在論者にとっては、「すべての諸事物が空性」であることを認めないのは当然の帰結である。しかし、この「すべての諸事物の空性」と同様の表現をめぐって、後の MMK 諸註釈家の中では、VV と異なる解釈がなされている。それが MMK. XIII. 3, 4 偈であり、この偈を龍樹の偈とするか、対論者の偈とするかという、問題に発展している。

VV において龍樹が主張していた「すべての諸事物の空性」であるが、同様の表現の解釈が MMK 諸註釈書では対論者の偈として解釈されている。特にその問題の中心となるのが、次の MMK. XIII. 3 偈である。

bhāvanāṃ niḥsvabhāvatvam anyathābhāvaadarśanāt /

nāsvabhāvo bhāvo 'stī bhāvanāṃ śūnyatā yataḥ //

諸事物は無自性(離自性)である。変異することが観察されるから。〔また、〕自性が無い事物は存在しない。諸事物の「空性」〔が成立している〕から。³⁵ 【MMK. XIII. 3】

VV の空性と無自性の用例を踏まえて一読すると、龍樹の偈と理解して問題ないだろう。VV でも bhāvanāṃ niḥsvabhāvatvam や bhāvanāṃ śūnyatā といった表現が龍樹の主張とされていた。MMK 諸註釈書では第 3 偈を対論者の偈として解釈し、第 4 偈の ab 句も文脈上対論者の主張として解釈している。その第 4 偈が次のものである。

もし、自性が存在しないならば、何にとって変異することがあるのか。

もし、自性が存在するならば、何にとって変異することがあるのか。³⁶ 【MMK. XIII. 4】

しかし、前半 ab 句と後半 cd 句で論者を分けるという解釈は本来不自然であり、この偈は特に前半 ab 句と後半 cd 句でディレンマとなっている偈であって、なおさらである。実は、この偈と類似が指摘されている³⁷MMK. XV. 9 偈がある。

もし、本性が存在しないならば、何にとって変異性があるのか。

³⁵ ここは第 3 偈の前半後半ともに龍樹の偈と見た試訳である。

³⁶ *kasya syād anyathābhāvaḥ svabhāvaś cen na vidyate /*

kasya syād anyathābhāvaḥ svabhāvo yadi vidyate // 【MMK. XIII. 4】 MMK. p. 212.

³⁷ 中村[1975]、斎藤明[1982]参照。

もし、本性が存在するならば、何にとって変異性があるのか。³⁸ 【MMK. XV. 9】

このように、自性 (svabhāva) が本性 (prakṛti) となっているものの、かなり類似した偈となっている。龍樹本来の解釈とは考えにくいだが、諸注釈書の中では PSP だけが第 13 章第 4 偈の解釈との整合性を取るために、この偈を前半 ab 句と後半 cd 句で論者を分けて解釈をしていることは、一貫性があると言えるだろう。

詳しくは拙稿清水[2016]でも論述しているので、ここではあまり深くは立ち入らないが、龍樹が MMK を著した当時、元々は第 13 章全体が龍樹の偈であったと解釈できるだろう。そのように解釈すれば、第 3 偈、第 4 偈において、自性の「有」と「無」が否定され、自性が「有」でも「無」でも変異することはありえないが、実際には変異することが観察されるのだから、諸事物は「無自性 (離自性)」である。そのように自性がまったくの「無」なのではない、あり方そのものが「空性」であることが明らかにされている³⁹、と解釈できる。この解釈は、前後に説かれている偈とも齟齬はない。

しかし実際には、後代の MMK 諸注釈書のほとんどが、この第 3 偈が対論者の偈として理解している。実在論的に「諸事物には無自性性がある、空性がある」と理解して批判する対論者が想定されており、続く第 4 偈前半の ab 句までを対論者、後半の第 4 偈 cd 句からが龍樹の主張であると理解している⁴⁰。しかし、VV における対論者との論争を見れば明らかに、「空」や「無

³⁸ prakṛtau kasya vāsatyām anyathātvam bhaviṣyati /
prakṛtau kasya vā satyām anyathātvam bhaviṣyati // 【MMK. XV. 9】 MMK. p. 240.

³⁹ 龍樹が見ていた可能性が高い最初期の般若経である『道行般若経』に対応するであろう Skt にも、同様の空性表現が見られる。sarvadhammāṇāp sūnyatā. ASP. pp. 148. II. 27-30. 管見のところ、『八千頌般若経』に sūnyatva はほとんど用いられない。その数少ない用例も、すべて sūnyatva の Abl の理由句の用例となっている。斎藤明 [2004]p. 94 では「「空 (性)」の語に代わって、般若経ではしばしば、すべての法に共通した性質 (あるいは本質) という意味をもつ法性 dharmatā の語が採用されている」と述べられる。龍樹も般若経典で説かれるような、「法性」と等置される、あらゆる諸事物の普遍的な真理として「空性」を説いていたとも考えられる。

実は、このような空性は PSP 第 XV 章にも説かれている。ここでは諸法の法性 (dhammāṇāp dharmatā) を、諸法の自相 (svarūpa)、自性 (svabhāva)、本性 (prakṛti)、空性 (sūnyatā)、無自性 (naiḥsvabhāva)、そして真如 (tathatā) と等置する。PSP. pp. 264. I. 11-265. I. 2. 長尾[1967]p. 276 参照。村上氏も、諸法の法性 (dhammāṇāp dharmatā) が自相であり自性であると表現されていることに注目している。村上[1992]pp. 103-105. 註 5 参照。

⁴⁰ では、どうして後の註釈家が MMK. XIII. 3 偈と第 4 偈 ab 句を対論者の偈として解釈することになったのか。VV に見たように、対論者の主張に合わせた論争をする中で、帰謬として「空は存在する、しない」というように説いていたことと関係があると思われる。そして後の時代に、対論者が実在的に「空という性質 (dharma)」、あるいは「空という自性」を想定して批判するようになった。よって、MMK の諸註釈家たちも、やむを得ずこの偈を対論者のものであると註釈せざるをえなくなったのだと思われる。

また、MMK. XIII. 3 偈に見られるような Gen. の用法に、実在的なニュアンスがあることから、このような

自性」といえば、実在論者にとってそれらは反射的に「無」を意味する。よって、無自性という性質や、空という性質を実在的に想定し、批判するような対論者は MMK や VV が著された当時はいなかったと考えられる。よって、VV に見られる対論者の空理解に基づく限り、MMK 第 13 章全体を龍樹の偈と見ることが可能である⁴¹。

以上、後代の MMK 諸註釈書の理解によれば、MMK. XIII. 3 偈に説かれる「諸事物の空性」(bhāvanāṃ śūnyatā) は「諸事物には空性という性質がある」とする対論者の実在論的な主張であるとされていた。しかし、同様の表現が VV にも龍樹の主張として説かれており、第 13 章全体を龍樹の偈と見た方が前半 ab 句と後半 cd 句で論者を分けるような不自然な解釈をする必要もなくなる。

MMK. XXVII. 29 偈で説かれた śūnyatva が、VV においてはより実際的な対論者との議論のやり取りの中で多用されていた。そして、その VV に見られる śūnyatva の用例が転換点となり、いつしか Gen. に限定される「空(性)」や「無自性」を実在的に捉える対論者が出てきてしまった。そこで、MMK 諸註釈書においても、本来は龍樹の偈であった第 13 章第 3 偈、第 4 偈 ab 句を対論者の偈としてみなさなければならなくなった、という思想史的な流れが想定できるだろう⁴²。

3. VV における śūnyatā と śūnyatva の差異に見る龍樹の空思想

この第 3 章では、以上の考察を踏まえて、VV に説かれた龍樹の空思想について、「縁起」との関係に触れながら、今一度考察してみたい。

龍樹が反論を始める 21 偈では、

もし私のことばが、因と縁との総体にも、それから独立したものとしても存在しないならば、自性が存在しなくなるので、諸事物の空であること (śūnyatva) は証明されるではないか。⁴³ 【VV. 21 偈】

解釈がされるようになったのだとも考えられる。斎藤直樹氏によれば、「ウディヨータカラ (Udyotakara ca. 550-610) は属格で表現されて、なんらかの属性の帰属先となる対象(基体)が非有であってはならないとする見解をしめしている。」斎藤直樹[2010]pp. 97-98, 註 33, 註 34. p. 104, 註 42 参照。小川英世[1986]参照。

⁴¹ 註 1 参照。VV が龍樹の真作でなかったとしても、以上の考察から、VV は MMK 諸註釈書よりも前に成立していたと考えられるので、MMK 諸註釈と同等、あるいはそれ以上に MMK 本来の解釈を継承しているとも言えるだろう。

⁴² そして、そのように第 13 章第 4 偈のディレンマを崩して解釈をすることと整合性を取るために、PSP は第 15 章第 9 偈も前半 ab 句と後半 cd 句で論者を分けて解釈をした。

⁴³ hetupratyayasāmagryāṃ ca prthak cāpi madvaco na yadi / naṇu śūnyatvaṃ siddhaṃ bhāvanāṃ asvabhāvatvāt // VV. p. 121.

『廻詮論』に説かれる空について（清水）

と説かれる。その *sūnyatva* とは、自註にあるように、「〔中観論者の〕ことばの空であること」を指している。21 偈の自註で、(中観論者の) ことばは、さまざまな因や縁にも、因と縁の総体にも存在せず、因と縁の総体を離れ、独立しても存在しないのだから無自性である。よって中観論者の「ことばの空であること」が証明される。すべての諸事物についても同様であるから、

この場合、君が『君（中観論者）のことばが空であるから、すべての諸事物の「空性」は妥当しない』と言ったのは正しくない⁴⁴。【VV.21 偈、自註】

と龍樹は反論する。ここで、対論者はことばが空であることを無であるとして理解し、諸法に包括的・全体的な真理としての「空性」を正確に理解していない。続く 22 偈では、

諸事物が「縁起して存在していること (*pratītyabhāva*)」⁴⁵が「空性」である、とわれわれは言うのである。縁起している存在 (*pratītyabhāva*) には自性がないのである。【VV.22 偈】

君（＝対論者）は諸事物の「空性」の意味をよく確定しないで、「君のことばが空であるから、〔すなわち〕無自性であるから、無自性である君のことばによって、諸事物の自性を否定することは妥当でない」と非難を述べ始めたのである。この場合には「諸事物が依存して存在していること (*pratītya bhāvānām bhāvaḥ*)」というそのことが、「空性」なのである。なぜか。無自性であるから。実に、縁已生のものは、自性を有して存在しているのではなく、自性がないから〔成立しているの〕である。なぜか。因や縁に依存しているからである。もし事物が自性として存在するならば、因と縁を取り除いても、〔それは〕存在するだろう。〔しかし、実際には〕そのような場合には存在しない。それゆえ、〔事物は〕無自性であり、無自性であるから、空であるといわれる。このように、私のことばも縁已生であるから無自性である、無自性であるから、空であるのは妥当である。⁴⁶ 【VV.22 偈、自註】

⁴⁴ 本稿 p. 11 で上述した。

⁴⁵ 五島[2009]p. 15 では、この *pratītyabhāva* を VV(Y)の写本情報から *pratītya bhāvānām bhāvaḥ* としているが、アーリーヤーの韻律に反するので、J の校訂を支持する。しかし、自註では韻律の問題がないので、VV(Y)の写本情報を支持する。よって、ここの第 22 偈 ab 句の *pratītyabhāva* も意味上は *pratītya bhāvānām bhāvaḥ* ということになるだろう。

⁴⁶ *yaś ca pratītyabhāvo bhāvānām sūnyateti sā brūyām / yas tu pratītyabhāvo bhavati hi tasyāsvabhāvatvam* // VV.22 //

sūnyatārthaṃ ca bhāvānām bhāvānām anavasāya pravṛtta upālambhaṃ vaktuṃ ⁴⁷ *tvadvacanasya sūnyatvāt tvadvacanasya niḥsvabhāvatvād evaṃ tvadvacanena niḥsvabhāvena bhāvānām* ⁴⁸ *svabhāva* ⁴⁹ *pratiṣedho nopapadyata iti / iha hi yaḥ pratītya bhāvānām bhāvaḥ* ⁵⁰ *sā sūnyatā / kasmāt / niḥsvabhāvatvāt / ye hi pratītyasamutpannā bhāvās te na sasvabhāva bhavanti svabhāvābhāvat / kasmāt / hetupratyayasāpekṣatvāt / yadi hi svabhāvato bhāva bhaveyuh, pratyākhyāyāpi hetupratyayaṃ bhaveyuh / na caivaṃ bhavanti / tasmān niḥsvabhāva niḥsvabhāvatvāc chūnyā ity abhidhīyante / evaṃ madīyam api vacanaṃ pratītyasamutpannatvān niḥsvabhāvaṃ niḥsvabhāvatvāc chūnyam ity upapannam* // VV. pp. 121-122. (a)は VV では

と説かれる。VV. 22 偈の自註にあるように、君（＝対論者）は「空性」の意味を確定せずに非難を始めたのだと言い、龍樹はここで『諸事物の「空性」の意味』を明らかにしていく。この VV. 22 偈では、「空性」と「縁起」と言い換え、その証因として（諸事物は）縁已生であるから、無自性であり、空であることを明らかにしている。

VV. 22 偈で「縁起している存在 (prāṭhyabhāva)」が二度用いられているが、これは丹治氏が指摘しておられるように、二義を担っている⁴⁷と理解すべきである。ここで丹治氏は明言していないが、五島氏の指摘があるように⁴⁸、自註に見える「諸事物が依存して存在していること (prāṭhyabhāvānāṃ bhāvaḥ)」⁴⁹は前者の「縁起して存在していること」を指していて、「縁起 (prāṭhyasamutpāda)」を指していると理解するべきだろう。というのは、明確に「空性」と等置されているからである。そして後者は、「縁已生のもの (prāṭhyasamutpannā bhāvaḥ)」と自註で明確に言い換えられており、ここの bhāva は「個々の存在」を指しているのだろう。

そして、続く VV. 22 偈の自註において、

車や壺や布などは、縁已生であるから自性空 (svabhāvasūnya) であるが、それぞれ、木材や草や土を運んだり、蜜や水やミルクを蓄えたり、寒さや風や日光から〔人〕を保護するというような、それぞれのはたらきをするのである。それと同様に、この私のことばも縁已生であるから、無自性であっても、諸事物の無自性であることを証明するはたらきをするのである。⁵⁰

tvadvacanasya niḥsvabhāvatvād bhāvānāṃ だが、VV(Y)を支持する。(b)は VV では prāṭhyabhāvo bhāvānāṃ となっているが、VV(Y)を支持する。

⁴⁷丹治[1992]p.56 では、前者を「依存して存在する（ものである）こと」、後者を「依存して存在するもの」と解釈されている。また、龍樹にとって、「縁起 (prāṭhyasamutpāda)」と「縁已生 (prāṭhyasamutpanna)」には明確な区別があったと思われる。五島[2009]p.5 では、MMK において「縁已生」を「空 (śūnya)」によって説明する場合、それを「縁起」と言い換える（あるいは総括する）ことはあっても、「縁已生」の語を直接「空性 (śūnyatā)」に結びつけることはないことを指摘している。この「縁已生」の位置付けは VV でも変わらないようである。

VV において「縁已生 (prāṭhyasamutpanna[-tva])」は 10 回用いられるが、複数形で用いられったり、単数形を修飾している。またそのうち 4 箇所では Abl. の理由句となっている。すなわち「縁已生」も śūnyatva のように、「縁起」(＝「空性」)を証明するために、諸事物の個々の存在の次元で用いられているのだと考えられる。

⁴⁸ 五島[2009] pp. 15-16. 参照

でも、「縁起」を指すと思われる語である、と説明されている。

⁴⁹ J/R は偈の校訂にしたがって、ここも prāṭhyabhāva としているが、韻律の制約がない自註であるため、ここでは写本情報を採用している。

⁵⁰ yathā ca prāṭhyasamutpannatvāt svabhāvasūnyā api rathapaṭaṭṭhaṭṭādayaḥ sveṣu sveṣu kāryeṣu kāṣṭhaṭṭamṛtikāharaṇe madhūḍakapayasāṃ dhāraṇe śītavātāpapaṇitṛāṇaprabhṛtiṣu vartante, evaṃ idaṃ madīyavacanāṃ prāṭhyasamutpannatvān niḥsvabhāvaṃ api niḥsvabhāvatvaprasādhane bhāvānāṃ vartate / VV. p. 122.

『廻詮論』に説かれる空について（清水）

と述べる。「個々の存在」の次元において、「無」と同義であると誤って理解された無自性や *sūnyatva* は、縁已生によって、無自性であるからこそ「無」と同義でないことが根拠づけられる⁵¹。よって、龍樹のことは、縁已生であり無自性であるからこそ、諸事物が無自性であることを証明することが妥当なのである。そのように成り立っているあり方こそが諸事物の「空性」の意味であり、「縁起」であると龍樹は言う。

以上のように龍樹は、空 (*sūnyatva*) や無自性、縁已生を用いて個別的・単一的なあらゆる諸事物について説示し、あらゆる諸事物の包括的・全体的な真理としての「空性」(=「縁起」)を明らかにしようとしていたと考えられる。

VV. 23 偈以降では幻や化作の喩えによって、空 (=無自性) であることばによっても、自性の否定が可能なことを主張する。そして、VV. 28 偈の後半では MMK. 24. 10 偈を引用し、「言説諦」(*vyavahārasatya*) にふれている。

言説に依らずして、勝義は説きえない。勝義に依らずして、涅槃は悟りえない。⁵² 【MMK. XXIV. 10】

すなわち、空を虚無的に捉える対論者に対して、言説に従わずに理法は説きえないのだから、言説を認めずに、「すべての諸事物の空性」を説示するのではない。それゆえ、すべての諸事物は空であり、すべての諸事物が無自性であることは、「中観論者のことば」と「すべてのものが空であること」という両者⁵³において妥当するのだと龍樹は言う。

さらに VV. 66 偈とその自註では、

もしその理解が自性としてあるならば、依って生じたものでなくなる。その理解が、依っているものならば、それこそが「空性」ではないか。【VV. 66 偈】

またもし、陽炎において、水であるかのような理解が自性としてあるならば、〔それは〕縁已生でなくなるだろう。なぜならば、〔そのような〕理解が陽炎に依って、誤った観察に依って、正しくない思惟に依って生じてきたとすると、〔それが〕縁已生であるから。なぜなら、縁已生だからこそ自性として空な

⁵¹ 丹治氏も偈の *pratītyabhāva* を『単に「縁って生ずる」というだけでなく、空が決してないのでもなく、無というよりは寧ろ有であることを強調しようとしたからであるといつてよいだろう。』としている。

⁵² *vyavahāram anāśrītya paramārtho na deśyate / paramārtham anāgamyā nirvāṇaṁ nādhigamyate* // 【MMK. XXIV. 10】 MMK. p. 420.

⁵³ 梶山氏や斎藤直樹氏はこの両者を言説諦と勝義諦とされている。梶山[1974]p. 157, 註(32)、斎藤直樹[2008]p. 294 参照。丹治[1992]p. 64 も筆者と同じ方向の理解であるが、どちらの理解も考えうる。

のである。【VV.66 偈、自註】⁵⁴

という。自註にあるように、陽炎を水であるとみなす理解は、陽炎や、誤った観察、正しくない思惟によって生じている。すなわち縁已生であるから、自性として空なのである。偈に説かれる「空性」とは、まさにそのようなあり方を指している。

以上、VV において、対論者が一貫して「空」や「無自性」、そして「空性」を「無」、すなわち「存在しない」の意味に理解していた。それに対して、それらが決して「無」の意味ではないことを、あらゆるものが縁已生であることを根拠に説示した。一方、本来的に諸事物は空であり、自性がないことも、縁已生によって説かれていた。すなわち、そのように縁已生によって示された「有」と「無」を離れたあり方が「中道」であり、「縁起」であり、「空性」であるというのが、龍樹が明らかにしようとしていたことであった。まさにそのことが VV. 70 偈の自註に説かれていた、「中道」と「縁起」と「空性」が等しいということの意味であった。

結論

MMK と VV における *śūnyatva* と *śūnyatā* の用例の分析から、以下の諸点が明らかになった。MMK で一度しか用いられなかった *śūnyatva* の用例が転換点となって、VV において、特に龍樹の中心思想である「空性」(*śūnyatā*) の妥当性をめぐる対論者との実際的な論争のやり取りの中で *śūnyatva* が多用されるようになった。その *śūnyatva* はことばを始めとするあらゆる諸事物が個々の存在の次元で空であることを示すために用いられ、対論者との論争の中で、空であることを理由句で述べるために Abl. で用いられていることが確認できた。

また、後代の MMK 諸註釈書の理解によれば、MMK. XIII. 3 偈に説かれる「諸事物の空性」(*bhāvānāṃ śūnyatā*) は「諸事物には空性という性質がある」とする対論者の實在論的な主張であるとされていた。しかし、同様の表現が VV にも龍樹の主張として説かれており、本来虚無的に「無」として理解される「空」や「無自性」を、實在的に「有」として把握するような対論者は想定されていなかった。このことから、VV に基づく限りでは、MMK 第 13 章全体を龍樹の偈として理解が可能である。

VV においては、「空」や「無自性」を一貫して虚無的に理解する対論者に対して、それら「空」や「無自性」が決して「有」の意味でも「無」の意味ではないことを、縁已生により根拠づけて

⁵⁴ *sa yadi svabhāvataḥ syād bhāvo na syāt praṭītya samudbhūtaḥ /
yaś ca praṭītya bhavati grāho na śūnyatā saiva* // VV. 66 //

*yadi mṛgaṭṣṇāyāṃ sa yathājalagrāhaḥ svabhāvataḥ syān na syāt praṭītyasamutpannaḥ / yato mṛgaṭṣṇām ca praṭītya viparītaṃ
ca darśanaṃ praṭītyāyoniśomanaskāraṇaṃ ca praṭītya syādurbhūto 'taḥ praṭītyasamutpannaḥ / yataś ca praṭītyasamutpanno 'taḥ
svabhāvataḥ śūnya eva* // VV. pp. 147-148.

『廻諍論』に説かれる空について（清水）

いた。まさにそのように「有」と「無」を離れたあり方が「中道」であり、「縁起」であり、「空性」であるというのが、VVにおいて龍樹が明らかにしようとしていた空思想であった。

略号およびテキスト

Abl : Ablative.

ASP : *Aṣṭasāhasrikā- Prajñāpāramitā*, (ed.) P. L. Vaidya, *Aṣṭasāhasrikā- Prajñāpāramitā*, With Haribhadra's Commentary Called *Ālokā*, Buddhist Sanskrit Texts No.4, Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, Dharbhanga, 1960.

Gen : Genitive.

Loc. : Locative.

MMK(Y) : 中論頌・梵藏汉合校・导读・译注、叶少勇著、上海中西书局、2011年（『中論頌』）

MMK(P) : *Mūlamadhyama-kārikās*, publiée par Louis de la Vallée Poussin, 1903- 1913.

NV : *Nyāyabhāṣyavārtika of Bhāradvāja Uddyotakara*, Edited by Anantalal Thakur, New Delhi 1997 (Nyāyacaturgranthikā. Vol. II).

Pāṇini : *Aṣṭādhyāyī of Pāṇini*, Roman Transliteration and English Translation by Sumitra M. Katre, Delhi, 1989.

PSP : *Prasannapadā of Candrakīrti, Mūlamadhyamakārikas de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire Candrakīrti*, ed. Louis de la Vallée Poussin, Bibliotheca Buddhica4, Reprint, Tokyo, 1977

Skt : Sanskrit.

VV : *Vīgrahavyāvartanī*, E.H.JOHNSTON and ARNOLD KUNST(ed.) *Melges chiois et bouddhiques*, 1951

VV(Y) : *Vīgrahavyāvartanī Sanskrit translation and Tibetan translation*, ed, by YONEZAWA Yoshiyasu 『成田山仏教研究所紀要』第31号、2008年

『道行般若経』：『道行般若経』支婁迦讖訳、T. No. 224, vol. 8, ed, by 辛島静志 『道行般若経校注』創価大学・国際仏教学高等研究所、2010年

参考文献

Jan Westerhoff

[2010] *The Dispeller of Disputes*, Oxford University Press.

Tola & Dragonetti

[1995] Fernand Tola and Carmen Dragonetti, *Nāgārjuna's Refutation of Logic*. Delhi, Motilal Banarasidass.

- [1998] “Against the attribution of the Vīgrahavyāvartanī to Nāgārjuna”, *Indische Philosophie* 42, pp. 151-166.

Ye Shaoyong(叶少勇)

小川英世

- [1986] 「Kaṇḍabhaṭṭa の bhāvapratyaya 論」『広島大学文学部紀要』45, pp. 94-118.

奥住毅

- [1988] 『中論註釈書の研究 チャンドラキールティ『プラサンナパダー』和訳』大蔵出版

梶山雄一

- [1974] 「廻諍論」『大乘仏典 14 龍樹論集』中央公論社、文庫版 2004 年, pp. 139-191.

桂紹隆

- [1988] 『インド人の論理学』中公新書

桂紹隆・五島清隆

- [2016] 「龍樹『根本中頌』を読む」春秋社

金沢豊

- [2010] 「『中論頌』における「見」の研究」龍谷大学大学院文学研究科学位（博士）論文

五島清隆

- [2008a] 「龍樹の仏陀観—龍樹文献群の著者問題を視野に入れて」『インド学チベット研究』12, pp. 137-169.

- [2008b] 「龍樹の縁起説—とくに相互依存の観点から」『南都仏教』92, pp. 1-26.

- [2009] 「龍樹の縁起説—とくに十二支縁起との関連から」『南都仏教』93, pp. 1-37.

三枝充恵

- [1984] 『中論—縁起・空・中の思想（上）（中）（下）』レグルス文庫

清水仁

- [2016] 「『中論頌』第 XIII 章の研究：第 3 偈と第 4 偈の帰属問題を中心に」龍谷大学大学院文学研究科紀要 38, 39-61, 2016

斎藤明

- [1982] 「『中論頌』解釈の異同をめぐって」『佛教学』14, 佛教学研究會, pp. 65-88.

- [2004] 「空・唯識・仏性」『岩波講座・宗教、第 4 巻、根源へ』岩波書店, pp. 77-104.

斎藤直樹

- [2008] 「「言明」と「否定」—無自性と空をめぐる論争」『慶応大学日吉紀要』40, pp. 267-296.

- [2010] 「「名称」と「実在」：無自性と空をめぐる論争 II」『慶應義塾大学日吉紀要』25, pp. 79-113.

『廻諍論』に説かれる空について（清水）

丹治昭義

[1992]「廻諍論の空」『関西大学東西学術研究所研究叢刊「実在と認識」』pp. 46-80.

長尾雅人

[1967]「明らかなことば（中論月称釈）第十五章 自性の考察」『世界の名著2 大乘仏典』中央公論社、pp. 271-286.

長尾雅人・桜部建

[1974]「迦葉品（カーシャパの章）」『大乘仏典9 宝積部経典』中央公論社、pp. 5-124.

中村元

[1975]「『中論』諸注釈における解釈の相違」『橋本博士退官記念仏教研究論集』pp. 65-79.

[1988]『チャンドラキールティ中論註和訳』国書刊行会

松本史朗

[1997]『チベット仏教哲学』大法輪閣

宮元啓一

[1999]「新校訂本漢訳『廻諍論』」『國學院大學紀要』37、pp. 73-99.

宮本正尊

[1954]「中論、梵漢藏対照語彙」『大乘佛教の成立史的研究』附録第二

村上真完

[1992]「般若経類の空思想とウパニシャット」『真野龍海博士頌寿記念 般若波羅蜜多思想論集』山喜房佛書林、pp. 73-112.

望月慧海

[1989]「『般若灯論』第13章試訳」『立正大学大学院年報』7、pp. 69-86.

山口益

[1973]「廻諍論について」『山口益仏教学文集 下』春秋社 pp. 7-33.

〈キーワード〉

龍樹(Nāgārjuna)、『中論』(Mūlamadhyamakakārikā)、『廻諍論』(Vigrahavyāvartanī)、空性(sūnyatā)

(博士後期課程)